

地域イベント活性化への一提案

1. イベント疲れの分析（現状）

夜須町では、夏のイベントは7月に「マリンフェスティバル YASU」、秋のイベントは11月に「ヤ・シィの秋まつり」(以降：秋まつり)が開催されています。

「マリンフェスティバル YASU」は、「海に感謝！海への思いを大切に・・・」をテーマに、実施回数も20回を超え、「ミスマーメイドコンテスト」や「鉄人ボートレース」など、地域を盛り上げるイベントとして定着しています。

祭りの実施主体は、マリンフェスティバル YASU 実行委員会事務局で、主な構成は、地元漁協、JA、商工会、婦人会、青年団などです。

実行委員会は、6ヶ月前より打ち合わせを開始し、月1回のペースで会議を開催し、内容を確認・検討していきます。

夜須町活性化のために始まったイベントは、当初は「手伝い」という立場で楽しく参加でき、皆とも仲良くできていたように思います。しかし、イベントが定着し、毎年開催するなかで、企画内容の定番化によって企画のマンネリ化がおこり、イベントに参加する側は、ボランティアの強制や当て職の責任の重さで、だんだんとイベントを楽しめなくなりました。主催者として単なる行事への絶対参加が命題となり、とても疲れを感じている状態です。

イベントの事務局を関係団体で持ち回りするため、前年の反省が活かせず、新しい企画を打ち出しても、それを実行する団体もない現状です。実行委員会に参加する人は本業との兼ね合いもあり、人的・時間的に余裕がない分、事務局に負担を与え、発展的な会の運営が困難になっています。新イベントを企画すると、各団体に協力の依頼が来ますが、常に会へ参加する人は決まっているため、結果として同じ人に仕事が増えるだけになります。目的と主旨が変わっただけで、人も内容も新しい感じがしません。

人を集めるという目的は、そのイベントの開催時や時期によって、広告やPR、広報で大盛況に終わりますが、一年を通じての人集めやイベントへの参画は難しいと思われます。

イベントそのものや主旨・目的をもう一度皆が把握し、予算に応じた規模で皆に無理のないイベントを開催すればよいのではないかと考えます。去年は予算の都合もあり、イベント協賛・各団体で会場設営や決められた店舗管理運営等、協力しあい取り組むことができました。

主催者側も楽しめ、お客様にも喜んでもらえるイベントを開催・継続していくのに、何かできることはないかと考えました。この傾向は、多くのイベント

に見られるのではないかと思います、「地域イベントの活性化」を、今回の研究テーマとして設定しました。

2. 地域を活性化させるイベントの役割

(1) 地域イベントとは

「イベントとは何らかの目的を達成するための手段として行われる催事であったり、行事であったり、集まりである。」(日本イベント産業

巷に溢れんばかりに開催されるイベント。その種類は多岐にわたっており、博覧会のような大規模なものから地域組織による小規模のもの、また、種類も次のように様々です。

博覧会・見本市など見せるための展博イベント

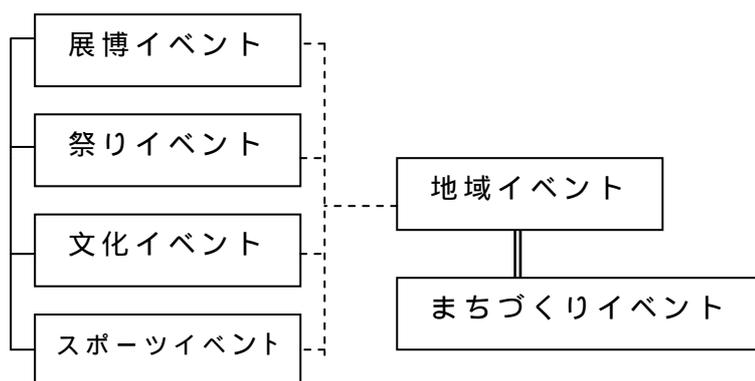
伝統的な文化継承のための祭りイベント

音楽・芸能・芸術などを発表するための文化イベント

体育大会など競争や交流のためのスポーツイベント

このように見てみると、イベントにはそれぞれ目的があることが分かります。イベントは開催そのものが目的ではなく、何らかの目的を達成するための手段なのです。ですから、その目的を達成させ、加えて根強いイベントを樹立させるためには、明確な目的意識を持つことが大変重要であるといえます。

今回取り上げた「地域イベント」は、従来のイベントの概念だけでは整理できず、複合的な要素(複合型プログラム)で構成されている比較的小さい地域を対象として行われるイベントということになります。



(2) 地域活性とイベント

では、イベント開催は、地域にどんな影響を与えているのでしょうか。

地域とは単にその土地のみではなく、「人々が生活している様々な場」という捉え方ができます。そして、その中において伝統文化の継承、歴史の創造が行

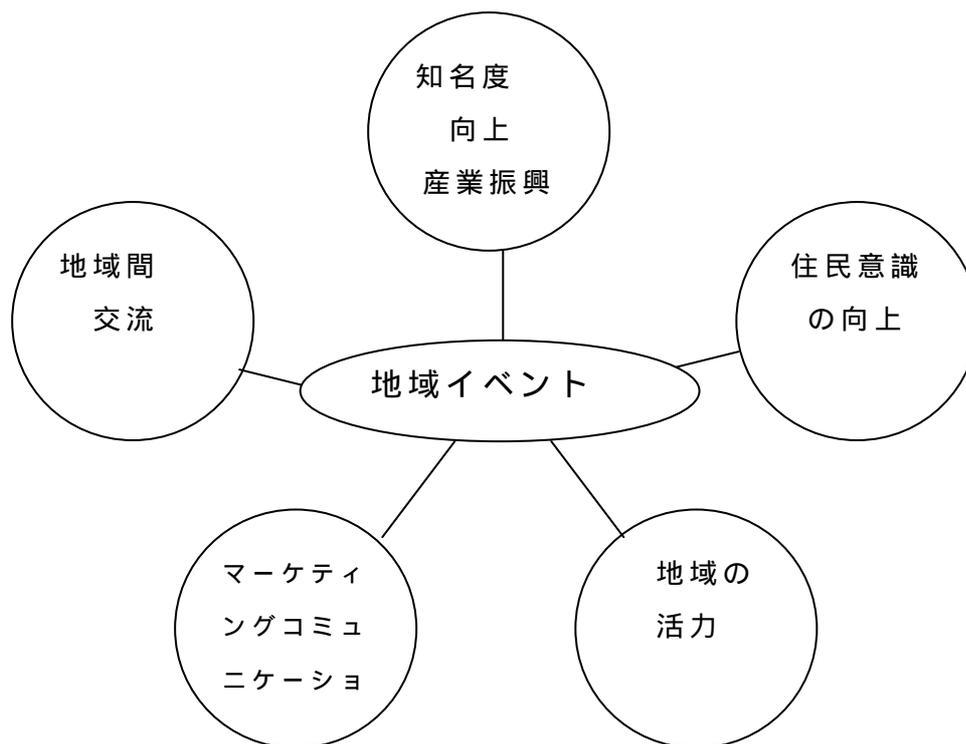
われています。ゆとりのないこの時期、今こそ地域を見直す必要があります。

「地域活性化」や「まちづくり」は、全国各地で、かなり以前から取り組まれています。そのひとつの手法としてあげられるのがイベントです。イベントとは、そもそもどういうものでしょうか。人はみな、何を求めてイベントを開催するのでしょうか。そしてまた、何を求めてイベント会場に来場するのでしょうか。

開催者は・・・

まず、開催者側からの視点で考えてみます。地域にあるお宝（個性やブランド）をもとに、それを広く発信し、まちのイメージアップを図る（**知名度の向上、産業振興**）、楽しませる（**住民意識向上**）や、地域の和を確認し合う（**地域間交流**）、出店による販売（**マーケティングコミュニケーション**）、またそういった刺激により地域を元気にする（**地域の活力**）、そんな思いからイベントが開催されるのではないのでしょうか。

開催者側から見た地域イベントの効果(イメージ図)



来場者は・・・

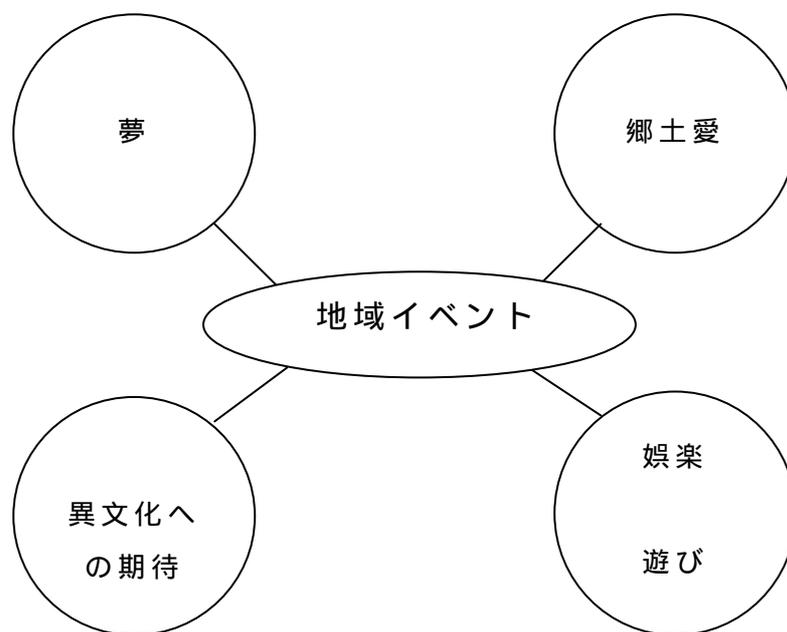
一方、来場者には大きく分けて2通りの参加者があります。ひとつは地域住民の来場、もうひとつは地域外からの来場者。

地元の住民は地域の良さを知り、馴染みのあるそのお宝が、イベントの開

催というものにより、いかに色づけられ賑わうだろうという楽しみ（**夢**）を味わうでしょう。また、地域の知人が多く集い、懐かしさを覚えながらふるさとの魅力を振り返ります（**郷土愛**）。

そして、地域外からの来場者は、イベント開催地のお宝に期待を秘めてワクワクした気持ち（**異文化への期待**）で会場に向かうでしょう。また、出店で掘出し物があることやどきどきするゲームに参加することなどを願いながら現地に向かったりもします（**遊び・娯楽**）。

来場者側から見た地域イベントの効果（イメージ図）



イベントの地域活性化

さて、このような地域イベントは、実際に地域を活性化させているのでしょうか。地域の活性化には地域のお宝（個性やブランド）というものが重要です。どの地域でも定番の「ふるさとまつり」、これも何かを付加することにより、その地域のブランドを売り、個性を表現することが出来ます。イベントの主催者には、地域に埋もれた個性を発掘する、もしくは生み出す、そしてそれを生かすという大きな課題があります。しかし、各地域で様々な工夫がなされてはいますが目を見張るようなものは多くは見つかりません。

企画、制作、実施に至るまで、長期また多岐にわたる準備作業はするものの、地域の活性化は一時的なものという例が少なくはないと思います。イベント関係者の中には、地域イベントは、一時的な経済効果、一時的な地域の

盛り上がりなどがあげられるのみで、あまり期待できるものが無く、唯一楽しみなのは、次回開催までにどれだけのリピーターが現れるかという期待だけだという声も聞かれます。

しかし、せっかくイベントの盛り上がりで生まれる地域の新しい活力を活かさないのはあまりにも残念なことで、その活力を結集することが、地域活性化につながっていくはずです。そのための「働きかけ」や「仕組み」が必要だと思えますし、先にも述べたように、地域イベントはそれ自体が目的ではなく、地域活性化のひとつの手段でもあるのです。

このように地域イベントを開催することは、様々な部分に波及し、効果を生み出す可能性を秘めています。社会的効果（地域風土や住民力の仕組みを変革する）・文化的効果（地域が持つ独自の資源を大切にすること）・経済的効果（地域の産業を元気にすること）など大きな役割が期待できるものなのです。地域イベントで生まれる活力は、活かし方一つで個性豊かで潤いのある元気な社会づくりの玉手箱なのです。

3. 今回試みた実験 —— 学生との連携 ——

(1) 夜須町「ヤ・シイ秋まつり」

先にも述べたとおり、夜須町では、7月に「マリンフェスティバル YASU」、11月に「ヤ・シイの秋まつり（以下「秋まつり」という。）」が開催されています。夏のイベントは2月から実行委員会を月に1～2回開き、7月にイベントを実施すると、約1ヵ月後には秋まつりの実行委員会が立ち上げとなります。

2004年の秋まつりは、8月に道の駅やすの駅長、商工会、JA、漁協、役場が集まり、実行委員会が開かれました。月に1～2回の打ち合わせには、毎回10人前後の人が集まり、日程、事務局、予算、備品、販売品目等を協議します。秋まつりは、補助金がないため、前年の販売手数料と、出店企業から得る出店料をもとに運営します。そのため、テントの確保や設置など、「自分たちでできることは自分たちで！」が基本となりますが、その分、個人の負担が大きくなったことは確かなことです。イベントで販売手数料を除いた売上金は、自分たちの活動資金にあてます。それが、夏のイベントとは違い、がんばった私たちへの「ご褒美」となります。

1回目の実行委員会で「みなとオアシス制度」についての説明がされました。この制度は、海浜やその周辺の既存施設や広場など（みなと）を、快適な空間（オアシス）として活用するために、市町村や住民と連携・計画した「みなとオアシス」に対し、国土交通省四国地方整備局長が認定・登録を行い、いろいろな支援を行うものです。要するに、この制度をうまく活用して、町民・町外の人た

ちにもっと、ヤ・シィパークや周辺の施設を利用してもらうのが目的です。この制度に、本登録をしていくために、本年度の調査として、秋まつりに助成金を受けることができました。実行委員会で話し合った結果、この助成金はイベントの経費のみに使用するのではなく、何か新たなことに取り組むために使いたいということでした。例えば、「社会実験」としてのイベント実施・アンケート調査などに充てるなど、今後につながる発見をすることなどです。

しかし、何に取り組むかが私たちの頭を悩ませました。夏・秋といつも同じ顔ぶれのメンバー、発言した人が責任を持って、そのことに取り組まなければならないような雰囲気を漂わせた会議、1年を通してイベントに追われ余裕がなくなっている私たちには、新しい発想はなかなか思いつくものではありませんでした。

この雰囲気を打開するには、新たな風を吹き込むことだと思い、大学生に参加してもらうことを提案しました。それが可決され、「こうち人づくり広域連合（以下、「広域連合」という。）」を通じて高知大生に、10月末の第3回実行委員会から参加してもらうこととなりました。

10月27日に実行委員会が開催されましたが、広域連合から1名、高知大学から1名の計2名の参加がありました。秋まつり開催まで1ヶ月をきっている状況でありましたので、イベントの企画は大体決まっていたが、「パットライス無料配布」を実施する人が不足していることや、初めて取り組むことになった「おもしろ野菜コーナー（以下、「おもしろ野菜」という。）」の展示のレイアウトなど未定の箇所もありました。当日の会議で、この2点について、学生と一緒にすることとなりました。

この日参加の学生が、まず行ったことは、イベント前日及び当日の人集めです。実行委員会の要望は7人でしたので、ゼミ及び学部内のサークルを中心に行いました。人集めの課題は、夜須町までの交通費などの経費負担でした。この点については、実行委員会から交通費を含めた日当が支給できないものか検討し、ほぼ実費に相当する額（2日間で1人2000円）の支給が決定しました。また、「おもしろ野菜」の企画

日	内容	参加人数	交通手段等
10月27日	実行委員会	2人	自家用車
11月11日	実行委員会	3人	自家用車
11月16日	JAとの打ち合せ	3人	高知大学
11月18日	パットライス試作	1人	JR 交通費支給
11月20日	祭り準備	7人	JR 日当支給
11月21日	祭り当日	7人	JR 日当支給

は、JAから預かった写真を、デザインの得意な学生に企画を頼みました。

11月11日に最終の実行委員会が開催され、広域連合から1名、高知大学から2名の計3名が参加しました。前日及び当日の人集めは、日当の支給もあり確保されました。野菜コーナーは、植物の不思議な力（生理障害）によりできた「おもしろ野菜」を展示して、訪れた方に見て楽しんでもらうことが一番だったのですが、計画が突然であったため、収集ができなかったことや、作ろうとして簡単にできるものではないので、これまでの数年の間に、JAで保管してあった写真を使うことになりました。そして、展示するために看板を3枚用意しました。写真と看板3枚をどのように使って仕上げるかは、学生のユニークな発想で企画され、作成することになりました。

学生の参加により、今までと違った発想で企画され活性化された議論となりました。これからは、その企画に基づきレイアウトに必要なものを作成することです。多くの学生に夜須町に来てもらうわけにいかず、JA担当が高知大学に出向き、3名の協力を得て約5時間をかけて作成しました。また、パットライスを作る技術を修得することが必要で、ここは、学生の代表1名に日を改めて夜須町に来てもらうこととなりました。

祭り前日は、テント・机・椅子等の設置をして会場作りをしました。

当日は、早朝から、テント立て、売り場準備などの準備作業を一緒に行いました。日中は、人気の「パットライス無料配布コーナー」を専門にお願いしました。

学生の皆さんは、事前の打ち合わせ以上に、自作POPを用意したり、呼び込みをされるなど積極的に担当作業をこなしてくれました。おかげで、例年より円滑にイベントが進み、パットライス配布量も例年の17%増しが配布できました。また、力仕事や、水仕事など嫌がる仕事にもチームワークよくやってくれました。楽しそう



に(?)作業に当たっている姿がイベント全体のイメージアップにつながっていると感じています。

「おもしろ野菜」での企画力は、3枚が出来上がるまでにいろんな案がだされました。曲がった大根にサングラスを付けて、サーフィンをしているところに見立てたり、何に見えるか参加した者同士で例えてみたりして、どんな仕上が

りにするか議論されました。最終的に、1枚は、貼り付けた写真に吹き出しをつくりおもしろおかしく仕上げました。2枚目は、ただ見るだけではなく、写真の上の扉を開くと写真が見える工夫がなされました。3枚目は、「これなんだ？」のクイズ形式にして、写真の野菜が何であるか当てるようにしました。作っているときは、大きく感じた1枚1枚でしたが、当日野外に展示してみると小さく、目立ちませんでした。また、午後からは強風が吹き、危険なので建物の隅に追いやられてしまいました。せっかくの学生の感性・力作が、あまりお客様の目に留まらず残念でした。

今回、学生に参加してもらい、その企画力と行動力は、評価できるものでした。十二分の戦力になったと思います。ただ、計画当初から参加していれば、学生の新鮮な感性で、提案、準備、進行、実施、反省ができたのではないかと感じています。

それと、祭りへの参加意識については、少し疑問が残ります。地域を活性化させる、または、自らの活動資金を得る、という目的が主催者としてはありましたが、学生の参加は、そういった目的では捕らえられていませんでした。「手伝い」として参加することが柔軟な発想力を生んだのかもしれないませんが、地域に活力を生み出すという共通の土俵には立っていないと、今回は感じました。そういった意味で、新しい形でイベント協力者が増え、とても嬉しいことではあるのに、同じ会場にいても交流を持つことができず、それぞれがどんなことをしているか把握できないことが残念でした。それは、私たちの側にも、今回にかかわらず、「こなす」「大変」という思いで、周りがどんなことをしているか知ることができず、それが、今後イベントをどのようにしていくべきか見えなくなっているのも一因ではないかと思えます。

今回、学生の方々には、日当のみで協力してもらうことができました。実行委員会から当日の片づけまで、14,000円の経費となりましたが、今後につながる事が実現できていけばよいことを望んでいます。

(2)赤岡町「冬の夏祭り」

冬の夏祭りは、そもそも町外のひとりの学生の目から始まりました。「絵金まつり」で見た赤岡のまちの人たちに惚れ込んだ彼の、「おもしろいあったかい人々と何かやりたい」というつぶやきが発端となり、町内商店街の発案・構想により創りあげられたイベントです。10回を数えましたが、固定様式の中に押しやらず、毎年コンセプトを変え「人間への信頼性」と「人間共同体への親密感」を高めていくこと、つまり商店街の売り上げアップのみならず、住民が赤岡のまちを好きになることにより、地域コミュニティへの親近感が高まり、

ひとつひとつのつながりが強くなることを目的としています。会場の赤岡横町商店街では、町内外、県内外から集まったひと達が自由に好きなことをやっている、例えば、フリーマーケットや手作り自分ブランドの食べ物や手・工芸品等を買ったり、民族音楽の演奏をしている、その脇で歩行者天国になった商店街におかれた炬燵こたつや卓袱台ちゃぶだいに座って雑談したり、ご飯を食べたりしているひとがいる、なんとも風変わりな風景のイベントです。

この冬の夏祭りは、「そこにいるひと、祭りに来るひと、みんなが楽しむ2日間」のイベントであり、主催する側もいかに自分たちが楽しむか、自由な中に横並びでない個性をいかに主張できるかを企画の段階から考えています。当初から当時の高知工科大学の学生（赤岡商店街で週末だけ個性的な喫茶店をオープン）や、まちに集う様々な人たちのいろんな向きや強さの風を柔軟に取り入れており、楽しみながら地域の人々を巻き込んでいこうとしています。

そんな中で今回の冬の夏祭りは、12月4日（土）5日（日）の2日間で行



われしました。1日目は雨、2日目は強風という天気の中、高知大学社会経済学部の学生が3名参加しました。企画、運営の段階は飛び越えて、祭り当日に主催者側が準備していた企画の手伝いをするというものでした。学生にとっては、冬の夏祭りがどういったものか知らないまま飛び込んだ、飛び込まされたという形になったと思います。具体的には、商店街の家電商品のPRを、踊り付きの流行歌に合わせておもしろく紹介したり、映画「タイタニック」のヒーロー、ヒロインになって、主催者

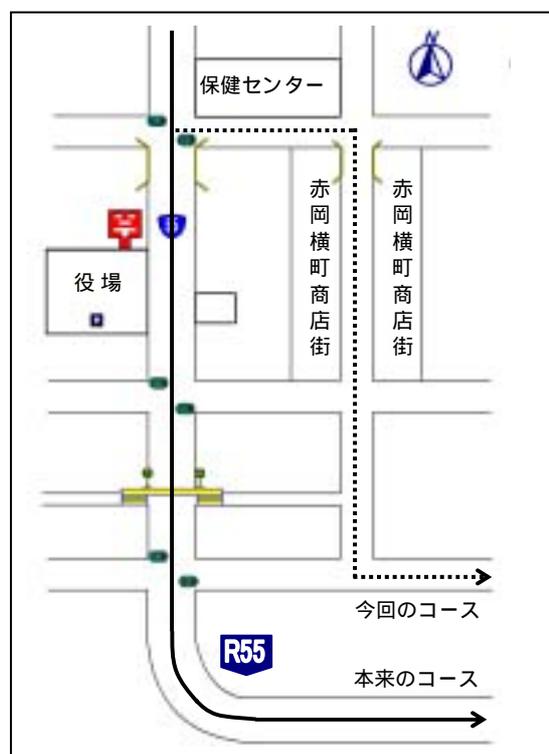
自作のタイタニック号甲板で写真が撮れるコーナーで、1人で来たひとのための相手役等をお願いしました。

参加した学生の祭りの感想や、地域イベントに参加することへの意見としては、「知らない場所でのイベント参加には勇気がいったが、いろんな出会いがあり楽しかった。」「地元の名産品の宣伝に努力していることがよくわかった。」「まちのひとが、そのひとの普段の姿を想像することができないくらい祭りモードに入っていて思いっきり楽しんでいるように見えた。」「恥ずかしかったけれど楽しかった。」「みんなが、赤岡を好きという気持ちが伝わってきた。」「赤

岡にいくつかあるお祭りのターゲットの特定もありでは？」、「クリエイティブなひと達が祭りを楽しむパワーに自分自身のエネルギーを充電できる気がする。」、「視点の違う者同士の意見交換ができる。」、「社会人だけの討議に学生が加わることでより柔軟な話し合いができるのでは？」、「知らない土地で地域イベントに参加することにより、その土地を知りそこにいるひとに触れ、既製品でない血の通った人脈ができる。」、「自分の視野を広げより多くの価値観にふれるよい機会になる。」などというものでした。

(3)高知大学「室戸貫歩」IN赤岡町

冬の夏祭りの前段になります。高知大学の学生から、学生の400～500人が参加するという高知大学の一大イベント「室戸貫歩」を「冬の夏祭り」開催日に合わせることができたらおもしろいのではないか？という提案がありました。結局、今回は日程調整ができなかったのですが、学生からは、冬の夏祭りの前週にあたる11月27日(土)に「プレ冬の夏祭り」として、室戸までの途中に赤岡商店街を歩き、町並みを楽しみ、赤岡の美味しいものや人情に触れてもらい、また来たいと思うきっかけ作りをしようという企画が提案されました。高知方面から歩いた時に、ちょうど赤岡の商店街の入口近くにある町の保健センターに休憩所を設け、豚汁やお茶を販売しながら冬の夏祭りを含め「元気赤岡」のPRをしました。室戸貫歩に参加した学生の3割近くの100人程が国道沿いから商店街を歩くコースをとったようでした。



赤岡という小さな町の小さな商店街で、イベント時とは違う素顔の商店街、町並み、ひとを見るという試み、町としても絵金祭りや冬の夏祭り以外では町外のひと達が、それも学生のような若者が商店街を歩くことがほとんどないため、それだけで賑やかになり活気ができるとおおいに期待をしていました。実際には、疲れて黙々と歩く学生と商店街との交流は、思ったほどの成果はなかったのですが、企画した学生側、受け入れる側の町としても、そこは反省点として次回につなげたいと考えています。

また、「プレ冬の夏祭り」の提案者のなかに赤岡町出身の学生が1名おり、町

や商店街との連絡等を行っていましたが、住処としての町からイベントを起こし、大学という社会の仲間に紹介するという動きのなかで、新たな町の魅力を発見し、ひととの出会いがあり、改めてわが町のよさを実感できたようでした。

4．学生がイベントに参加する意義

(1)学生側の意見

今回イベントに参加した学生の意見を聞いてみました。

(ア)今回参加してみてどうでしたか？

- ・当日、自分の居場所があり、祭りに居やすかった。
- ・企画に、もう少し入っていただけらと思った。(もっと前から参加したかった。)

(イ)つらかったことはないですか？

- ・交通費、お昼を出してくれたのはありがたい。
- ・時間的には何とかなる。(1～2回生の間は余裕がある。)
- ・朝が早かったのは、ちょっと辛かったが、でも、準備から関わっていたので、気持ちで行けた。
- ・参加の度合いによって、気持ちが違って来る。

(ウ)学生が地域のイベントに参加することについて

- ・大学の授業では学べないことを体験した。
- ・大学の授業で出てきたことの裏付けとなった。
- ・やりたい学生はいると思う。今回も、1回生の参加があった。
- ・やりたい気持ちはあるが、実行委員会などに飛び込んではいけない。何らかの情報が必要。

(エ)次回参加する場合の注意点

- ・今回は、責任のない立場だったので企画面で自由に意見が言えた。
- ・まずは手伝うというスタンスからだったので、すんなり入れたと思う。
- ・会の雰囲気には、少し慣れが必要。ある程度、知られないと、実行委員会では意見が言えない。

(オ)その他

- ・今回は、思ったことをやらせてもらっただけ。特別なことはしていない。
- ・「授業として、行かせてくれれば助かる。」という意見もでたが、そうすると逆に規制がかかるので動きにくくなる可能性がある。また、気持ちの低い学生が参加する恐れが出てくる。

学生の地域イベントへの参加は、彼らの自己啓発のよい機会であると考えます。そのことで、地域に入り、地域のひとと協働することや、イベントを創りあげ、成功させるためのルールや関わる組織内のルールを知り、その過程を体験することで、普段の大学生活や机上の学習では気付かないことが見えたりします。例えば、その地域独自の文化を知ること一つでしょうし、またその地域で暮らすひとに触れ、感性をぶつけ合うことで、創造性豊かな発想につながっていくこともあるのではないのでしょうか。そして、何より今まで彼らが培ってきた価値観、彼ら自身のスケールとは違う視点で広く物事を見ることができる様々な関わりが、それぞれの個性を認め合い、お互いを尊重することにつながり、ひとと物事も柔軟に受容できるようになるのではないのでしょうか。それらを通して、それまで自分が持っていた「地域 コミュニティ 人間」という概念が変わっていくのではないのでしょうか。それが、またより深く地域を知る、ひとを知ることへのきっかけになるとも考えられます。

結局、そうしてつながった人脈のなかで情報が流れ、それを受けて学生と地域のひと達の間をエネルギーが循環し、それはまた増幅され蓄えられ、各々に還元されていくのではないかと考えます。

(2) 大学としての考え方

教育システム

「今までの大学の教育システムでは実践経験が欠けている」と言われます。ここには、社会で今求められている実践的な力というものが十分に養われていないまま、学生が卒業している実態があります。旧来の教育システムでは、本当に社会に役立つ人材を供給できなくなりつつあるのです。

経験が無い学生は何を学べばよいのでしょうか。教室の中で学ぶことは、「過ぎ去った社会で正しいとされていた答え」が主であり、「目まぐるしく変化していく現在の社会に対応する答え」は学んでいないのです。答えが合っている、または、間違っているという観点だけで物考えることは、時代に適合していないと言えます。それにもかかわらず、過去の積み重ねを基礎にした「知識」のみから、現場の課題を解決しようとする教育方法には疑問を感じざるを得ないのが現状です。

そこで大学が目をつけたのは、地域社会です。地域現場の中には、通常の授業では得られない材料(教材)が多くあります。ほとんどの大学の教員は、図書や理論による答えは多く持っていますが、現場対応という経験的な知識は残念なことにより多くは持ち合わせていないのが現実のようです。

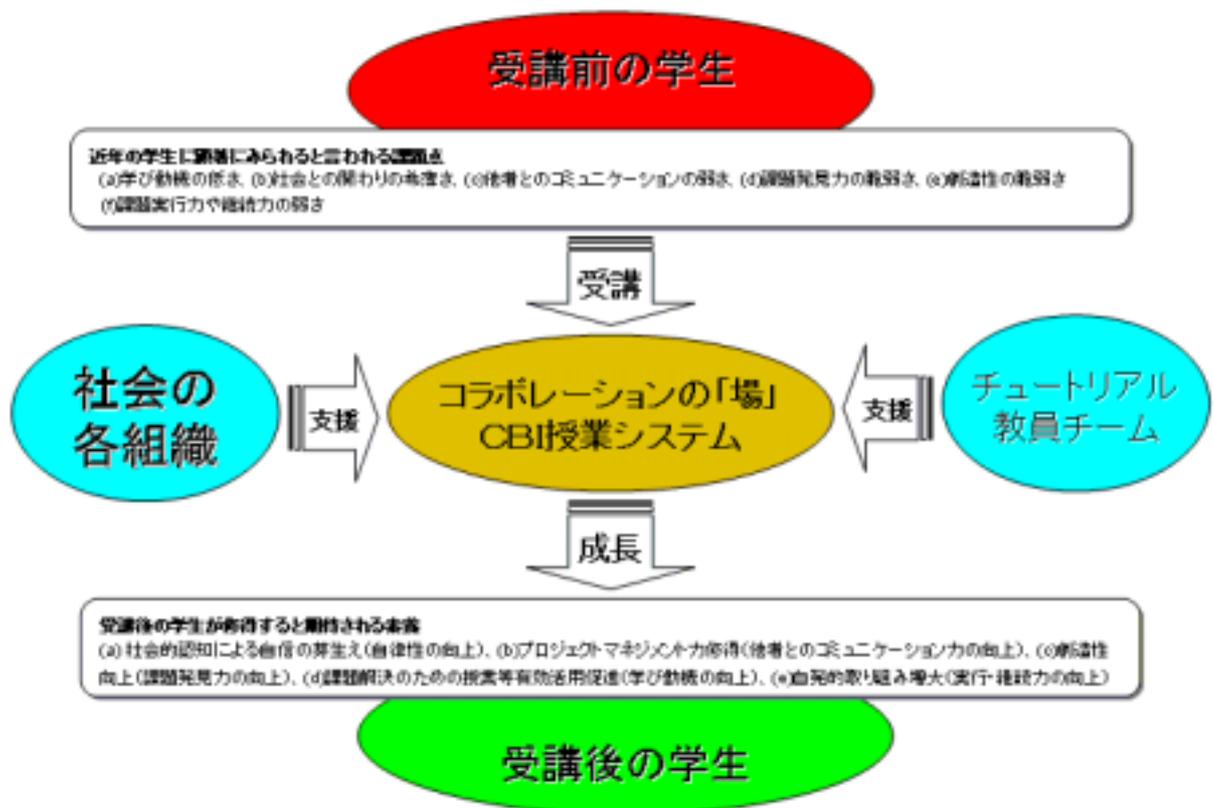
さらに、昔から社会のあらゆる場所に人材を育てる仕組みがあったのです

が、近年は、コスト削減や情報化社会の進展等様々な原因により、多くの組織の中での若い人を育てる仕組みが瓦解し始めました。ところが幸いにも、地域社会という単位でとらえるならば、まだその仕組みが僅かながらに残っています。

地域社会の教育力

そこで高知大学は、「地域社会が持つ教育力を人材の育成に活用しよう」と考えたのです。地域の課題を探しだす力（課題探求能力）や、自らその解決方法を創りだす力（課題解決能力）を養うことこそが、現代の学生の学ぶべきことだと捉え、昨年10月、全国に先駆けCBI（コラボレーション型インターンシップ）の授業システムに取り組み始めました。これは従来の二週間前後のインターンシップから脱却したもので、学生が企業などで長期にわたって企画立案や業務遂行に携わり、授業と社会での実践経験を有機的に連携させながら、その求められる能力を養うというシステムであり、本年度から2ヵ年、文部科学省から重点的予算の配分を受け実施をしています。

CBI授業システムのご概念図



出所) 高知大学ホームページ

さらに、C B Iを終えた学生が地域に入り、地域の人々と協働で課題解決に取り組み、それを大学が支援する教育システムも検討がなされています。実践による課題克服の萌芽を期待するC B Iは、変化する組織の構造を、身をもって理解することを目的としており、これを経た学生が、地域社会で新しい仕組みや組織を自律的に創り上げ、地域社会に変化を与えることを大学側は期待しています。いずれにしても大学が地域社会と協働して学びの「場」を創出することに、私たち社会人は大きな関心を持ち、協力を惜しんではならないと考えます。

(3) 実行委員会、観光行政担当の意見

(ア) 実行委員会の方

地域イベントを主催する側にとって、学生は、いわゆる「よそ者」になります。自分自身、この地域外の出身なのですが、地域イベントの実行委員会は、保守的な面もあり、私自身が困惑することもあることは事実です。しかし、橋本知事の草の根運動発祥の地であるとか、私を雇用していただいたことなど、進取の気風に優れ、良いものはどんどん取り入れていこう、という積極的な方のほうが多いと思います。現在、町でも高知工科大学のキャンパス誘致や産学連携による「まちづくり」を進めています。是非、当町との関わりをもって、お互いのためになる仕組みを考えていきたいです。

(イ) 観光行政担当の方

学生に「やりたい」の気持ちがあれば、イベントの規模にもよるが、受け入れたい気持ちはあります。基本的には、旅費のかからない方でのボランティアとなるのではないのでしょうか。学生には、アイデアと行動力を期待しています。

学生の参加は、恐らくスタッフに「こき使われる」事になると思いますが、「好き」ならできます。出会いがあります。いろいろな人間がいることを知ることができます。また、その土地を知り、その土地が好きになり、そこに住むことになるかもしれません。

地域のイベントにおいても、固定したメンバーの中でマンネリ化した内容を繰り返しては、個性も魅力も低下する一方ではないのでしょうか。新しい風を受け容れながら変化していくことが、根強いイベントづくりの秘訣であると思います。学生との関わりは、イベント疲れの要素として固着しつつあるものを取り払ういいチャンスとなることも期待されます。

また、高知には大学の存在そのものが必要不可欠です。地域から大学が消失してしまうと、一瞬にして多くの若者が高知から去っていくことにもなるのです。地域に求められる学校として生き残るためにも、高知という風土の中に社会人と学生の繋がりを築いていくことが急務ではないでしょうか。そのような仕組みの確立を地域も支援すべきであると考えます。

5 地域イベント活性化への一提案

(1) 地域イベントに必要なこと

ホットなコミュニケーション

イベントは人と人とが集まり、出会う場です。集まる人々の心のふれあいや喜びにより、文字やインターネットを超えたホットな人と人との心のつながりをつくります。心のふれあいのドラマづくりがイベントの基本です。

異なる価値の交流の場

イベントは、異なった価値を持つ人たちの交流と連帯、創造の場です。交流の中から、新しい目標の共有が生まれ、目標の共有は新しい努力への連帯を生み出します。連帯の共感の中から新しい価値が創造されます。イベントは、地域の異なった分野や世代の交流、地域の内と外との人たちの交流が大切なのです。

地域のしがらみくずし

地域には長い歴史があり、なかなか新しい変革の動きを出しにくいものですが、イベントは、非日常のことですから、従来のしきたりにとらわれず、自由に考え、新しいことにチャレンジし、思い切ったことができます。様々な立場の人が垣根を越えてエネルギーを結集することが大切となります。

柔軟な発想とチャレンジ精神

イベントは、地域の内外の異分野の人の交流を促進し、また、イベントを一緒にやって成功したという感動や体験を共有することにより、その中から新しい発想や企画を生み出し、新しい仕組みをつくりだし、新しいリーダーや実行者を生み出します。

また、地域の人々が集まってイベントの企画・実施を行う中から、柔軟な発想やチャレンジ精神が育ってきます。

(2) 地域イベント成功のポイント

地域イベントは、地域活性化のために、地域の人々の気持ちをおこすことです。したがって、地域住民にどれだけ参加意識を持たせることができるかが成功のポイントです。

イベントは地域の総力戦

地域でイベントを行うには、地域の人々だけでなく様々の力を結集して、はじめて実現します。行政だけでなく、住民組織や様々のグループ、自主活動を行っているグループなどたくさんの人々が自ら主役として頑張るなかで強い連帯が生まれ、イベント成功への力が結集でき、人々が力をあわせたイベントであればこそ、地域に深く根をおろした地域の人たちに愛されるものになり、地域の人が育ちます。

今回特に注目したポイント

地域のイベントに、地域外の学生が参加するという点、つまり、実行委員会の途中からの参加であるということから、まず、実行委員会のメンバーに「加わる」ということを第一に考えました。確かに、地域イベントには、柔軟な発想、チャレンジ精神が大切で、その点を学生には期待していました。しかし、まず会議のテーブルに座ることがなくしてそれはできません。今回は、マンパワーとして協力するところからスタートしました。

また、地域から生まれたイベントは、その目的、経過などがあり、地域外の学生は、そこを理解することも必要です。

イベントの趣旨、考え方などを理解し、委員会のメンバーとして加わることができて初めて、イベント企画についての発想、提案ができると思います。

(3) イベント疲れにならないための一提案

地域イベントの本質は、地域をおこす（活性化）するために、地域の人々の気持ちをおこすことです。

したがって、地域住民にどれだけ参加意識を持たせることができたか、あるいは実施できたかが大切であり、いかに住民の連帯感を創造する場とすることができたかが重要なことです。

ただ、地域イベントは、回を重ねるごとにマンネリ化してきます。イベントを実施するものの「疲れ」の原因の一つはここにあります。イベントをマンネリ化させないためには、「見直し、企画、継続、発展」というイベントのマネジメントサイクルを常に考えなくてはなりません。

今回の試みは、イベントを実施するメンバーに、学生を加えることによってイベント自体を元気にさせ、活力あるイベント実施することが可能ではないだろうかという考えで行ったものです。

イベントを活性化することによって、地域の人々の連帯感が深まっていくことが期待できます。また、学生自身が、その地域を知ることによって、その地域のファンとなり、その他の地域に根ざした活動に加わっていくことも期待できます。

以下、こうしたことを実施していくための提案を行います。

学生が参加するための仕組み

今回実施してみて、学生が地域のイベントに「参加したい」という気持ちが確認できました。ただ、現在の学生側に組織的なその仕組みがありません。

先に述べたように、学生が社会にはいって行くための仕組み（インターンシップ制度）が、変化しつつあります。従来の2週間程度の企業体験だけでなく、主にベンチャー企業などに、長期間、企画から入っていくコラボレーション型インターンシップ（CBI）が少しずつ広がっています。また、企業だけでなく、その範囲をさらに広げた、地域の活動へ入っていく取り組みも始まっており、これが実現されると、学生の「参加したい」が、大学のカリキュラムにも組み込まれていくものとなります。

しかし、いくら制度として仕組みができたとしても、必要なことは、参加していく学生の「やる気」であり、「その地域を好きになる気持ち」です。

今後、大学に期待されることは、仕組みづくりだけでなく、地域イベントに参加していく際に、どのようなサポートが必要になるのかを検討していくことだと思われます。

地域イベント実行委員会の情報公開

今回実施してみて、地域イベント実行委員会側に、学生に「参加してもらいたい」気持ちが確認できました。しかし、実行委員会の意向が、一般に知られていないので、個人的な繋がりが無い状態では、学生を参加させることはできません。現在の発達した情報化社会の中、実行委員会のメンバーを公募することは、いろいろと手段が考えられることであろうし、上でも述べたが、地域イベントの活性化は、行政にとってもメリットが多いので、行政がその役割を担ってもいいかと考えられます。

また、その際には、交通費等の何らかの実費支援が検討されていれば、なお効果的だと思います。

ここ数年の取り組みについての提案

、 で、学生の「参加したい」と地域イベント実行委員会の「参加してもらいたい」の会う仕組みの必要性については提案をしましたが、現在のようなまだ仕組みができていない状況の中で実施することは、一朝一夕には困難だと考えられます。そこで、今回取り組んだうえでの提案を、以下に行ってみます。

今回は、広域連合の調査研究事業の中で、担当教授とそのメンバーがお互いに情報を共有していたから実現したもので、実行委員会に学生が入っていたのも、そのメンバーの紹介があったことによるものです。また、担当教官も、大学でインターンシップを担当しており、学生の情報をより多く把握していたことも大きく影響しています。

これを実現していくには、このように中間に入る人の存在が不可欠で、その紹介のもとに実行委員会に入っていく、数回実施していく中で、お互いに信頼関係を築いていくことが必要だと思われます。この中間的な人は、大学においてはインターンシップ担当教官でしょうし、実行委員会、行政側においては、インターンシップを取りまとめる担当者であり、その両者が情報を取り合っていることが重要だと考えられます。

